

ポーシャの現代性

松本侑壬子・ジャーナリスト

シェイクスピアの最高傑作と言われる本作が、英語圏で本格映画化されるのは、意外なことにこれが史上初めて。題名を聞いただけで、シャイロックやアントニオ、ポーシャなどの登場人物の名前を思い浮かべるのはたやすい。これらの登場人物の誰が何をしたかは、大体わかる。が、なぜそうしたのか、は解釈次第。どのようにそうしたのか、は映画の醍醐味だ。

有名な古典劇だから、誰がやっても同じ、ではまったくない。いや、こんなに人間臭く面白いとは思っていなかった。「映画とは、観客を別世界へと誘うと同時に、現代社会とのつながりを感じさせるものだ」とマイケル・ラドフォード監督が言うとおり、400年前の人間ドラマが現代に重なって見える。いや、重なった場合、お見事！ と掛け声をかけたくなる人物が、昔のヴェニスにいたことに感動する。

それは、誰か？ 惚れ惚れするほど聡明で勇気があり、決断力も洞察力も、厳しさも優しさも、そして美しさ、その上すごい経済力もすべて持ち合わせた女性、ポーシャである。シェイクスピア劇随一の知的な女性と言われるポーシャだが、その現代に通じる魅力を痛快なまでに描いている。

舞台は1596年、ヴェニス。裕福な貿易商アントニオ（ジェレミー・アイアンズ）のもとへ年下の親友バツサーニオ（ジョセフ・ファインズ）が訪ねてきて借金を申し込む。放蕩生活ですっかり財産を使い果たしたが、美しい女相続人ポーシャ（リン・コリンズ）に求婚するための資金が要するというのだ。あいにくアントニオの全財産は船の積荷となって世界中の海の上だ。彼は自分が保証人となってコ

ダヤ人の金貸しシャイロック（アル・パチーノ）から金を借りることを勧める。無利子で大金を貸す条件は「3カ月の期限内に借金が返せなければ、胸の肉1ポンドを引き換えにもらう」というとんでもない内容だが、返済の自信があったアントニオは承諾する。が…。3カ月後、持ち船がすべて難破して借金返済の目途が立たなくなったアントニオを裁判に訴えたシャイロックは、あくまで法による公正な裁きを求め、法廷で包丁を研ぎ始める。あわや、というとき登場した小柄な若い法学博士の一言がすべてを決する。「切り取る肉は正確に1ポンド。一滴たりとも血を流してはならぬ」と。パチーノのシャイロックが哀れだ。

こうして窮地に立ったバツサーニオの恩人アントニオを救い、従者を連れて風のように立ち去った博士とは？ それは男装のポーシャだった。頭のよし悪しはジェンダーに関係ない。勇気も決断力も、機知もいたずら心も、男性と女性とで違いがあるわけではない。おまけに莫大な財力も美しさも兼ね備えて“ジェンダーフリー”の象徴のような人物だ。自分自身が十分かっこいいのに、若くてハンサムで、多分ちょっと不良な求婚者バツサーニオにぞっこん惚れて、夫に迎えたかわいい恋女房でもあるポーシャ。彼女と比べれば、夫バツサーニオなど愚かで子どものようだ。

16世紀にこうした自由で頼もしい女性がいたことが新鮮だ。男性に頼らず、男性と競わず、でも男性に負けず堂々と恋をし、夫に甘えてみせる多面体の女性。さすが、シェイクスピアだ。ところで、現代のポーシャって、さしずめ誰だろう？



英・米・伊・ルクセンブルグ合作映画 (130分) / マイケル・ラドフォード監督

『ヴェニスの商人』

10月29日よりテアトルタイムズスクエア(新宿)にてロードショー

